

【研究ノート】

「虹」から考察する汎アタヤル語群の「橋」と「梯子」

落合 いずみ

要 旨：台湾オーストロネシア諸語のアタヤル語、セデック語、サイシャット語において「虹」を意味する名詞句「神霊の橋」における「橋」の形式を考察する（アタヤル語とセデック語はアタヤル語群に属する）。これらは、アタヤル祖語では*hawŋu、セデック祖語では*hakaw、サイシャット語では *ɿinalob* である。アタヤル祖語とセデック祖語の形式 *hawŋu と *hakaw（これらの語は「橋」も「梯子」も表す）が同源関係にあると疑われるが、音対応が規則的でない。しかし、サイシャット語に「梯子」として *ha-haŋaw* という語があり、語根は *haŋaw* である。この語根とセデック祖語の *hakaw は語中子音が規則的な音対応を示さないこと以外は同一であり、同源語と見なせる。本稿は汎アタヤル祖語（アタヤル語群とサイシャット語を娘言語とする）を想定し、そこに *hakaw と *haŋaw の二つの形式を「橋、梯子」の意味として再建する。セデック祖語は前者を、アタヤル祖語は後者を用いるが、アタヤル祖語は母音を大きく変化させた（第一音節 *a > aw、第二音節 *aw > u）。次に、サイシャット語の *ɿ<in>alob* 「橋」は対象態・過去の接中辞 <in> が挿入されていると分析されるため、語根は *ɿalob* である。これにはセデック語に *galuk* 「繋ぐ」（接尾辞が付くと語末子音が *b* に変化する）という同源語が見られる。汎アタヤル祖語に再建される形式と意味は *Ralub 「繋ぐ」となり、更にオーストロネシア祖語として *RaLub と再建される。

キーワード：アタヤル語、セデック語、サイシャット語、橋、再建

1. はじめに

台湾オーストロネシア諸語とは、台湾先住民族によって話される、或は話されていたオーストロネシア語族に属する諸言語のことである。山地では現在も話されている言語が多いが、平地では漢民族化により現在では話されなくなった言語もある（図1で▲を付けた言語は消滅したか消滅の危機にある言語）。台湾オーストロネシア諸語にはアタヤル語、セデック語、サイシャット語、ツォウ語、カナカナブ語、サアロア語、アミ語、バサイ語、ブヌン語、ルカイ語、カバラン語、パゼツヘ語、サオ語、パイワン語、プユマ語、バブザ語、パポラ語、ホアニャ語、シラヤ語など20に及ぶ言語が含まれる。なお、台湾の離島である蘭嶼で話されるヤミ語もオーストロネシア語族に属するが、これは台湾オーストロネシア諸語には含めず、オーストロネシア語族マラヨ・ポリネシア語群に含める。

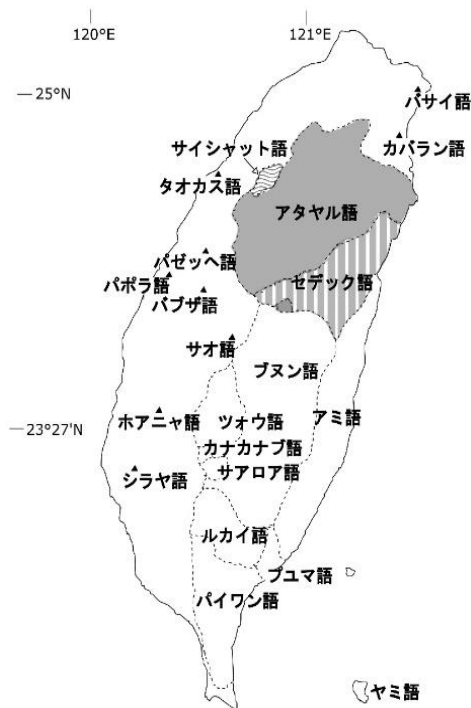


図1 台湾オーストロネシア諸語の分布

これら台湾オーストロネシア諸語のうち、アタヤル語とセデック語は系統的に近い言語でありアタヤル語群というひとつの言語グループに含める。本稿が主に扱うのは、アタヤル語群とサイシャット語である。Blust (1999) による台湾オーストロネシア語族の系統分類において (表 1)、アタヤル語群とサイシャット語は別々の言語グループと見なされる。サイシャット語は、パゼツヘ語とともに北西台湾語群に含まれている。しかし、本稿はアタヤル語群とサイシャット語が系統的に近い関係にあるとの仮定で、これらを包括した汎アタヤル語群を想定している¹。図 1 ではアタヤル語 (灰色)、セデック語 (縦縞)、サイシャット語 (波状) の話される地域に背景を施している。地理的に隣接していることがわかる。

表 1 オーストロネシア語族の系統分類 (Blust 1999 に基づく)

アタヤル語群	アタヤル語・セデック語
東台湾語群	バサイ語・カバラン語・アミ語・シラヤ語
プユマ語群	プユマ語
パイワン語群	パイワン語
ルカイ語群	ルカイ語
ツォウ語群	ツォウ語・サアロア語・カナカナブ語
ブヌン語群	ブヌン語
台湾西部平原語群	タオカス語・バブザ語・パポラ語・ホアニャ語・サオ語
北西台湾語群	サイシャット語・パゼツヘ語
マラヨ・ポリネシア語群	上記以外のオーストロネシア諸語 (ヤミ語など)

2. 台湾オーストロネシア諸語の「虹」

本稿の目的は、アタヤル語群とサイシャット語において「神霊の橋」と表現される「虹」の形式を考察することにより、その中に現れる「橋」とそれに関連する形式を再建することである。まず、アタヤル語群とサイシャット語のみが、「虹」を「神霊の橋」と表現することを示すために、台湾オーストロネシア諸語における「虹」がどのような形式で現れるかを検討する。表 2 では台湾オーストロネシア諸語について分析対象とする「虹」のほかに「橋」と「梯子」の形式を挙げた。台湾オーストロネシア諸語ではないが、参考までにヤミ語の形式も挙げた。「虹」の表現中に「橋」が含まれているかどうかが目される点だが、「橋」のほかに「梯子」も挙げたのは、この両方の意味が同一の語で表される言語が、台湾オーストロネシア諸語に少なくないためである。表 2 では、アタヤル語、セデック語、ブヌン語、カナカナブ語、ルカイ語、サオ語、バブザ語がそうである。

表 2 台湾におけるオーストロネシア諸語の「虹」と「橋」と「梯子」²

	「虹」	「橋」	「梯子」
アタヤル語	<i>hoŋu na utux, hawŋu na aliutux</i>	<i>hoŋu</i>	<i>hoŋu</i>
セデック語	<i>hakaw utux</i>	<i>hakaw</i>	<i>hakaw</i>
サイシャット語	<i>alub nuka habun, rinalub nuka habun</i>	<i>alub</i>	<i>hahayaw</i>

ツォウ語	<i>Hioyu</i>	<i>hiapeoeza</i>	<i>hiapeoeza</i>
アミ語	<i>tarakar ni Idək, talakal ni Adək, təkər no Idək</i>	<i>kayakay</i>	<i>tokar</i>
バサイ語	<i>len saɲajau, qaitsatsa u zijan</i>	<i>sapat tsatsan, --- kasaza-an</i>	
ブヌン語	<i>qanivalval, hanivalval</i>	<i>hatal, haundul</i>	<i>hatal, haundul</i>
カナカナブ語	<i>Varanuvana</i>	<i>cuɲɲkucu</i>	<i>cuɲɲkucu</i>
サアロア語	<i>varahuvalu</i>	<i>tukusu</i>	<i>sipailaluɲusa</i>
ルカイ語	<i>barilawlaw, θelevava, θaʔebakubaku, usalivakuɲvaku</i>	<i>taludru</i>	<i>taludru</i>
カバラン語	<i>qriwaRwaR</i>	<i>sazzan</i>	<i>sazaqisan</i>
パゼツヘ語	<i>Maxamax</i>	<i>sujut</i>	<i>ratarat</i>
サオ語	<i>Qariwaðwað</i>	<i>farukuð</i>	<i>farukuð</i>
パイワン語	<i>qulivaɲgraw</i>	<i>cakuɟaɲ</i>	<i>tadal</i>
プユマ語	<i>palətatiila^{2h}, ariwanəs</i>	<i>kayakay, aməkəɲ</i>	<i>raripaʔan</i>
バブザ語	<i>tariboan³</i>	<i>kittas⁴</i>	<i>kittas</i>
パポラ語	<i>qalaubauris</i>	---	---
ホアニャ語	<i>pa-li-pau-kai⁵</i> (打喇包咳)	<i>tah-tah</i> (達踏)	---
シラヤ語	<i>varonija</i>	<i>taltal</i>	<i>kada</i>
ヤミ語	<i>raɲiraj</i>	<i>matutud daraʔan</i>	---

これらの言語のうち、「橋」「梯子」に共通の形式が「虹」の形式の中に見られるのはアタヤル語とセデック語、「橋」が「虹」の形式の中に見られるのはサイシャット語であることが分かる。3節で詳述するが、これらの言語の「虹」は「神霊の橋」という名詞句になっている。

本題からは逸れるが、この三つの言語以外の「虹」の形式について言えば、ツォウ語のように語源的由来がわかるもの(2-1節)や、アミ語のように「畏」を用いた特殊な表現を有するもの(2-2節)、バザイ語のように「天」を用いた特殊な表現を有するもの(2-3節)がある。それらのほかに語内に重複を含む形式や、重複の有無にかかわらず *qali*-系列の自由変異形と考えられる接頭辞を持つものが多く見られる(2-4節)。

2-1. ツォウ語の「虹」

ツォウ語に *hioyu* という語があるが、Nevsky (1993: 107) はこの語が「色紐、色帯」の他に、「虹」を表すとする。これは本来「色紐、色帯」を表す語が、比喻により「虹」を表すようにもなったものだろう⁶。

2-2. アミ語の「虹」

アミ語の「虹」について、古野・馬淵(1938: 77)に次のような記述がある。

東海岸のアミ族で虹をタラカル・ニ・イルク...と云ふのも特色がある。タラカルは鳥の足をしめる罫、イルク（イドク）とはアミ族の間に広く語られてゐる一種の *culture hero* であつて天上から下界に降つて或る娘に婿入りし、人々に祭祀その他を教えた後、再び天上に戻つたと傳へられてゐる。

つまり、「虹」は「イドクの罫」と表現する。この罫は恐らく弓状に張られるものであり、その形状との比喩で生じた表現だろう⁷。

2-3. バサイ語の「虹」

表 2 に挙げられた二つの形式のうち、*len sanajau* はバサイ語バサイ方言の形式であり、「美しい天」という意味である。Tsuchida 他 (1991) によると、*len* は「天」、*sanajau* は「美しい」の意である。同じく Tsuchida 他 (1991) によると *qaitsatsa u zijan* はバサイ語トロピアワン方言の形式であり、「天のしるし」という意味である。それぞれの語について *qaitsatsa* は「しるし」、*zijan* は「天」の意とある。これらの間の *u* は恐らく連結辞だろう。ちなみに両方言で「天」を表す形式の *len* と *zijan* は同源語である⁸。

2-4. 重複型の「虹」と *qali*-系列の接頭辞

表 2 では「虹」の形式の中に重複を含むものも多く見られる。ブヌン語 *qanivalval*、カナカナブ語 *v<ar>anuvana* (*<ar>*は接中辞である⁹)、サアロア語 *v<ar>atuvatu*、ルカイ語 *barilawlaw*、*θelevava*、*θaʔebakubaku*、*usalivakuvaku*、カバラン語 *qriwaRwaR*、パゼツへ語 *maxamax*、サオ語 *qariwadwad*、ヤミ語 *rajiraj* が挙げられる。重複部分は太字で示した。これらの重複語根は CVC という音節構造を持つ（重複語根が CV であるルカイ語の *θelevava* の一例を除く）。重複語根を重複すると CVC-CVC の構造になるが、接合部には子音連続が生じる。また、例えばパゼツへ語の *max-a-max* のように結合部の子音連続の間に母音が挿入されていることもあるが、これは子音連続が生じるのを避ける目的で挿入されたものだろう。

Blust and Trussel (2010) は、上述のブヌン語 *qani-valval* とカバラン語 *qri-waRwaR* の「虹」の形式を同源語と認め、オーストロネシア祖語の形式として **-waRwaR* を再建している¹⁰。サオ語 *qari-wadwad* も疑似同源語として挙げられているが、難点は重複語根の末子音が音対応を示さないことである。サオ語ならば重複形は *-watwat* が期待される。仮にサオ語のみから祖語を再建するなら **-waLwaL* となる。

表 3 重複形の「虹」から再建される形式

*-waRwaR	ブヌン語、カバラン語
*-waLwaL	サオ語
*-baLbaL	カナカナブ語、サアロア語
*-bakbak	ルカイ語
*-maRmaR	パゼツへ語

このように完全な一致は示さないが同源語であると考えられるものとして付け加えられるのが、カナカナブ語 *v<ar>anuvana*、サアロア語 *v<ar>atuvatu*、ルカイ語 *θaʔe-bakubaku*、*usali-vakuvaku*、パゼツへ語 *maxamax* である。表 3 にまとめたように、

カナカナブ語とサアロア語から仮に祖語を再建すると **-baLbaL* になる。

ルカイ語から仮に祖語を再建すると*-bakbakになる。パゼツへ語から仮に祖語を再建すると*-maRmaRになる（パゼツへ語では重複語根の語頭子音が本来 *b* であったが、突発的に *m* に変わったとすれば再建形は*-baRbaRになる）。これらのうちのどの一つを祖形に選ぶか決めることはできないだろう。ただ、共通点として重複語根の頭子音は唇音であり、末子音は流音系の音素であることが挙げられる。ただし、ルカイ語から再建される形式では末子音が *k* になっているためこれは例外である。

この中でカナカナブ語とサアロア語は重複形にさらに接中辞<ar>を入れるタイプである。パゼツへ語は重複形をそのまま用いる（同源語ではないがヤミ語も重複形をそのまま用いる）。他の形式では、重複形にさらに接頭辞が付いている。これについて Blust (2001: 38-42) は、多くのオーストロネシア諸語において「虹」を表す語に、*qali*-系列の接頭辞が見られると述べる。Blust (2001) によると、この接頭辞の特徴は異形態が多く見られることであり、機能としては精神世界との危険なつながりを示すということである。Blust (2001) は、虹を指さすと指にけがをする類の民間伝承がオーストロネシア民族に広く見られることを述べている¹¹。この接頭辞の異形態は、Blust (2001: 38) によると「虹」が重複型であるかどうかに関わらず広くみられる¹²。表 5 から挙げると、ブヌン語 *qani-valval*、ルカイ語 *bari-lawlaw*、*θele-vava*、*θaʔe-bakubaku*、*usali-vakuvaku*、カバラン語 *qri-waRwaR*、サオ語 *qari-waḏwaḏ*、パイワン語 *quli-vayraw*、プユマ語 *pala-tatiila*^{2h}、*ari-wanəs*、バブザ語 *tari-boan*、パポラ語 *qalau-bauris*、ホアニヤ語 *pa-li-pau-kai* である。接頭辞は太字にて示した¹³。

3. 汎アタヤル語群の「神霊の橋」

表 2 で見たように台湾オーストロネシア諸語において「橋」を用いて「虹」を表現するのはアタヤル語群（アタヤル語・セデック語）とサイシャット語であった。古野・馬淵 (1938: 75) はアタヤル族とセデック族における「虹」の民間伝承について以下のように述べている。

虹について臺灣民族誌に比較的知られてゐるのは、これを以て神霊の橋となすアタヤル・セデック兩族の云ひ傳へであろう。虹を指す言葉自體も、若干の方言的相違は別として、大體アタヤル族ではホゴ・ウツトフ、セデック族ではハカウ・ウツトフと云つてゐる所が多い。ウツトフとは廣く神霊を指す語、ホゴ或ひはハカウは橋のみでなく梯子をも意味するが、虹の場合には概して神霊の橋と觀ぜられてゐるのである。

同じく、古野・馬淵 (1938: 77) はサイシャット族における「虹」の民間伝承について「北方のサイシャット族でリナルブ・ノカ・ハブン即ち神霊（ハブン）の橋と云ふのもこれと類を同じくするものであらう」と述べている。

アタヤル語群とサイシャット語において「虹」は「神霊の橋」というように「神霊」と「橋」から成る名詞句で表される。それぞれの言語における形式はカタカナ表記で挙げられており、アタヤル語は「ホゴ・ウツトフ」、セデック語は「ハカウ・ウツトフ」、サイシ

ヤット語は「リナルブ・ノカ・ハブン」である。これらの形式において、一語目の「ホゴ」（アタヤル語）、「ハカウ」（セデック語）、「リナルブ」（サイシャット語）がそれぞれ「橋」に相当する語である¹⁴。

まず3-1節でアタヤル語における「虹」について、約30の集落から1910年代に収集された形式を検討する。同様に3-2節ではセデック語における「虹」について、1910年代に収集された8つの集落からの形式を検討する。3-3節ではサイシャット語における「虹」について考察する。

3-1. アタヤル語の「神霊の橋」¹⁵

佐山（1918、1920）は約30ほどのアタヤル族の集落において収集した語彙集を載せている。その語彙の中に「虹」も含まれていた。これらはカタカナ表記されているが、鼻音には「^h」を付けて示すなど（例：ゴ は *go* ではなくて *ŋo*、さらに正確に言うと、音韻的には *ŋu* を表す）、表記に改良を加えている場合もある。表4に集落名（集落がさらに小さな単位に分れる場合は集落名とその中の小集落名）と「虹」の形式を挙げる。佐山（1918、1920）には、全ての集落についてではないが、「神」（神霊）を表す形式も多く挙げられている。これら「神霊」の形式も「虹」の形式の右隣に挙げる。これら佐山（1918、1920）によるカタカナ表記に続けて、本稿筆者が推定に基づき音韻的に書き直した形式を示している。例えばシカヤオ集落の「ホゴオットフ」とハック集落の「ホンゴオットフ」ではカタカナ表記が多少異なるが、ともに *hoŋu utux* を表したものの推定している。

表4 アタヤル諸集落における「虹」と「神霊」¹⁶

集落（集落）	「虹」（神霊の橋）	「神霊」
パスコワラン	ホゴオットフ <i>hoŋu utux</i>	オットフ <i>utux</i>
シャカロー	ホゴオットフ <i>hoŋu utux</i>	リュットフ <i>liutux</i>
スプトンノフ	ホゴオットフ <i>hoŋu utux</i>	オットフ <i>utux</i>
南阿冷	ホゴオットフ <i>hoŋu utux</i>	---
シカヤオ	ホゴオットフ <i>hoŋu utux</i>	オットフ <i>utux</i>
ハック	ホンゴオットフ <i>hoŋu utux</i>	オットフ <i>utux</i>
ムネボ（バヌン）	ホンゴオットフ <i>hoŋu utux</i>	---
ムネボ（シキクン）	ホンゴナオットフ <i>hoŋu na utux</i>	---
ムネボ（マナウヤン）	ホンゴナオットフ <i>hoŋu na utux</i>	---
ムネボ（ピヤナン）	ホンゴナオットフ <i>hoŋu na utux</i>	---
タラナン	ホンゴンオウットフ <i>hoŋu-n utux</i>	---
ガオガン	ホンゴンオウットフ <i>hoŋu-n utux</i>	オットフ <i>utux</i>
カラパイ	ホゴノオットフ <i>hoŋu nu utux</i>	リュットフ <i>liutux</i>
キナジー	ハオンゴヌオットフ <i>hawŋu nu utux</i>	ウットフ <i>utux</i>
北勢	ホーゴリョットフ <i>hoŋu liutux</i>	リョットフ <i>liutux</i>
クレサン（ピヤハン）	ホーゴリョットフ <i>hoŋu liutux</i>	---
南勢	ホゴルットフ <i>hoŋu lutux</i>	ルットフ <i>lutux</i>

メバラ	ホンゴリュートフ <i>hoju liutux</i>	リョットフ <i>liutux</i>
クレサン (キンノース)	ハオゴリョットフ <i>hawju liutux</i>	---
クレサン (クバボー)	ホンゴロットフ <i>hoju lutux</i>	---
チューブス	ホンゴナリュットフ <i>hoju na aliutux</i>	アリユットフ <i>aliutux</i>
マバトアン	ハオゴナオリョットフ <i>hawju na aliutux</i>	---
万大	ホンゴナモット <i>hoju na amutux</i>	アモットフ <i>amutux</i>
サラマオ	オットフオンゴ <i>utux hoju</i>	オットフ <i>utux</i>
マリラハ	ハカリナナットフ <i>hakri na natux</i>	リュットフ <i>liutux</i>

古野・馬淵 (1938) によると、アタヤル語の「虹」は「ホゴ・ウツトフ」と言うたと述べられていた。この形式は表 4 の最上列パスコワラン集落からムネボ (バヌン) 集落までに見られる形式 *hoju utux* に相当する。古野・馬淵 (1938) が述べるように *hoju* は「橋」または「梯子」、*utux* は「神霊」を意味する語である。修飾関係は、被修飾語が先、修飾語が後であり、橋・神霊という語順のこの名詞句は、「神霊の橋」を意味する。この名詞句の内訳は「橋」と「神霊」を表す二つの語だけであるが、これらの語の間に連結辞が割り込む場合もある。

ムネボ (シキクン) 集落からムネボ (マナウヤン) 集落までの三つの形式では、ともに上記の *hoju utux* の二つの語の間に *na* という形式が割り込んで、*hoju na utux* となっている。これは黄 (2000: 58-59) によると、アタヤル語の複合語における要素同士を繋げる連結辞である。この *na* における母音 *a* が消失し、語頭子音の *n* だけが見られると考えられるのが、タラナン集落とガオガン集落に共通している形式 *hoju-n utux* である。カラパイ集落とキナジー集落に見られる形式では連結辞が *na* ではなく、*nu* で現れていると考えられるが、なぜ連結辞の中の母音が *a* から *u* に変わったかはわからない¹⁷。

アタヤル諸集落に見られる「虹」の表現の統語構造をまとめると、「橋—(連結辞)—神霊」となる¹⁸。連結辞は用いられる場合も、用いられない場合もある。これは連結辞の挿入可能な方言と挿入不可能な方言とに分かれているというよりも、本来全ての方言において連結辞の挿入が行われたと考えられる。幾つかの方言で連結辞が見られなくなったのは、「虹」がひとまとまりの概念を表す一つの語と感ぜられるにつれて、連結辞を脱落した、統語的により緊密な形式が用いられるようになったためではないか。

これに関し、3-2 節で触れるセデック語の諸方言では、連結辞を用いた形式は見られない。セデック祖語は **hakaw utux* (橋 神霊) と再建されるが、仮に連結辞を用いて ***hakaw na utux* (**は仮定した形式の意味) としても (現代セデック語パララン方言では *hako na utux* になるが)、これは文法的に許容される形式であり、同様に「神霊の橋」と理解されるのである。ただし、連結辞の挿入された表現では、まるで神霊が用いる橋または梯子がどこかに実在して、それを指しているような感覚になる。つまり二つの名詞の意味を統語的に組み合わせた解釈をしている。「虹」の意味を引き出すには、やはり連結辞のない形式で言わなければならない。セデック語の「虹」も古くはアタヤル語のように「神霊」と「橋」を連結辞で繋いでいたのかもしれないが、現代では連結辞は用いなくなった。表 4 のアタヤル語諸方言における形式は連結辞を用いなくなる途中の状態を示していると言えるだろう。

う。

次に、二つの名詞「神霊」と「橋」の形式について詳細を述べる。「神霊」に以下の五つの類似形式が見られる。もっとも多く分布しているのが *utux* だが、ほかに *lutux* (南勢; クレサン (クバポー))、*liutux* (シャカロー、カラパイ、北勢、クレサン (ピヤハン)、メバラ、クレサン (キンノース)、マリラハ)、*amutux* (万大)、*aliutux* (チューブス、マバトアン) など多くの類似形式が見られる (括弧内に当該形式が確認される集落名を記した)。これら「神霊」の形式に関して、Li (1981: 284) はアタヤル語群祖語に **?aliutux* と再建している¹⁹。上記の諸形式はその反映形である。*aliutux* が祖形をそのまま保存している。万大集落では子音 *l* をなぜかはわからないが、*m* に変化させた。祖形から語頭母音を脱落させたのが *liutux* である。そこからさらに母音 *i* が脱落した形式が *lutux* である。もっと広く見られる *utux* は、3-2 節で見るセデック語の「神霊」と同一形式であるが、アタヤル語群祖形 **?aliutux* の語末の二音節を残して、それより前の音節を脱落させた形式だと言える。これは二音節語であり、類似形態の中で最も音節数が少ないのが特徴である。さらに言えば *utux* は、アタヤル語スコレック方言に主に見られるのに対し、それより音節の多い形式は主にアタヤル語ツオレ方言に見られる。

このほか「神霊」について表から観察できることがある。シャカロー集落とカラパイ集落において、「神霊」の形式は *utux* ではなく、より音節数の長い形式 *liutux* だが、「虹」(神霊の橋) の中に見られる「神霊」では、*utux* で現れる²⁰。また、マリラハ集落の「神霊」は *liutux* だが、「虹」(神霊の橋) の中に見られる「神霊」では、ナットフ (*natux* か?) へと変化している。なぜこのような変化が起きたかはわからない。

次に「橋」については、*hoju* と *hawju* の二つの形式が見られる。これらについて、後者に見られる二重母音 *aw* がより古い分節音であり、これが単母音化して *o* になったと考えられる。例えば、小川 (1931: 241) における *lawkah* 「強い」は現代アタヤル語では *lokah* に変わっている。そのため、アタヤル祖語に再建される「橋」は **hawju* となりそうである。

さらに、「橋」について例外的なのが、マリラハ集落の *hakri* という形式である。これについて、Li (1981: 279) も同集落から「橋」の形式を挙げているが、表 4 にも見られる *hakri* の他に、*hakaw* もある²¹。Li (1981) は、セデック語にも同一形式が認められる **hakaw* の方を、アタヤル語群祖語の「橋」として再建している。となると、*hak-ri* の方は、恐らく *hakaw* から語末の二重母音 *aw* を除いた形式 *hak* に対し、*ri* という余計な要素が接尾辞のように付いてできたものである。アタヤル語群に見られる、このような特殊な接尾辞の付加は、小川・浅井 (1935: 25-26) でも報告されている²²。つまり、*hakaw* のほうが古い形式である。アタヤル語の「橋」は、マリラハ集落の *hakaw* を除いて、すべて **hawju* に遡る。4 節で述べるが、マリラハ集落の *hakaw* という形式はセデック語からの借用の可能性がある。

3-2. セデック語の「神霊の橋」²³

佐山 (1918、1920) は 8 つのセデック集落において収集した「虹」の形式をカタカナ表記で載せている。表 5 では、それらカタカナ表記の後ろに、筆者の推定による音韻的表記を挙げた。

表5 セデック諸集落における「虹」

集落	「虹」(神霊の橋)
木瓜	ハッカウオットフ <i>hakaw utux</i>
内タロコ	ハッカオオットフ <i>hakaw utux</i>
外タロコ	ハッカオオットフ <i>hakaw utux</i>
タウサイ	ハッカオオットフ <i>hakaw utux</i>
バトラン	ハッカオオットフ <i>hakaw utux</i>
トゥルク	ハッカオットフ <i>hakaw utux</i>
パラン	ハマカオットフ <i>həmakaw utux</i>
トダ	ハマカオットフ <i>həmakaw utux</i>

木瓜集落からトゥルク集落までの6つは *hakaw utux* という形式であることがわかる。これは、古野・馬淵(1938)が「セデック族ではハカウ・ウツトフと云つてゐる所が多い」というのと一致している。古野・馬淵(1938)が言うようにハカウは「橋・梯子」であり、ウツトフは「神霊」であるので、アタヤル語の多くの形式に見られたように、二つの名詞から成る、「橋—神霊」という被修飾語—修飾語の関連にある名詞句を成し、

「神霊の橋」を表している。これらに対し、パラン集落とトダ集落に共通して見られる形式は *həmakaw utux* であり、「橋」の形式が多少異なっている。この形式は *hakaw* の語頭子音 *h* の後に、*əm* が割り込んだ様相を呈している。

この形式 *h<əm>akaw* は、筆者のフィールド調査によると「橋・梯子を架ける」という動詞である。名詞語根 *hakaw* 「橋・梯子」に対し、その名詞を動詞化する接中辞 *<əm>* (これは本来、動作主態を表す接中辞である) が付加されて派生されている。この「虹」の表現は、実は「神霊の橋」という名詞句を表すのではない。動詞 *h<əm>akaw* に後続する *utux* 「神霊」は主語の働きを考えると考えなければつじつまが合わない。セデック語の基本語順は述語—主語である。となると「神霊が橋を架ける」と表現していることになる。日本語で表現するところの「虹が出た」をセデック語では「神霊が橋を架けた」と表現したことが推察される。

表4のアタヤル語諸集落の「虹」形式において、「橋」は名詞の形式のみで現れていた。ところが、セデック語(パラン集落とトダ集落)の「虹」において、「橋・梯子を架ける」という派生動詞が用いられたのと同様の表現が、アタヤル語にも見られた。小泉(1932: 100)は「虹はハマゴオットフといわれてゐるが、それがシロンに架せられたる橋なのである。ハマゴは橋である」と述べている。ここでいう「ハマゴ」は *h<əm>awŋju* だと推察される。これはアタヤル語の *hawŋju* 「橋・梯子」に対し、動詞化接中辞 *<əm>* が挿入された形式である。これと同一の形式をアタヤル語の辞書に見つけることはできなかったが、二重母音 *aw* が *o* に変わった形式、*h<əm>oŋju* は小川(1931: 297)に「橋を造る」の意味で載っている。

ここまでをまとめると、アタヤル語とセデック語の「虹」にまつわる表現について、統語構造の異なる二つが得られた。まず、「虹」を表すのは「橋」と「神霊」という二つの名詞から成る名詞句である。アタヤル語の場合は *hawŋju na utux* (これは代表形であり、異なる形式は割愛する)、セデック語の場合は *hakaw utux* という。また、「虹が出る」を表すのは、「橋」から派生された動詞、「橋を架ける」と、主語として用いられる「神霊」であり、「神霊が橋を架ける」と表現する。アタヤル語では *h<əm>awŋju utux*、セデック語では *h<əm>akaw utux* であった。

3-3. サイシャット語の「神霊の橋」

小川・浅井(1935: 付録13)によると、サイシャット語の「虹」は *alob noka habon* であ

る。古野・馬淵（1938: 77）の挙げたサイシャット語の「虹」は「リナルブ・ノカ・ハブン」であった。このカタカナ表記を音韻的表記に書き換えると *.inalob noka habon* になると考えられる²⁴。

「虹」を表す形式は、一語目のみ多少形式が異なる二つの表現、*.inalob noka habun* と *alob noka habon* が見られる。三語目の *habon* は古野・馬淵（1938: 77）が言うように「神霊」である。二語目の *noka* は小川・浅井（1935: 112）によると、属格標識である。一語目の *alob* は、Li（1978: 165）によると「橋」であるが、もう一つの形式として語頭に *ɹ* の付いた形式 *.jalob* も挙げられている²⁵。これら「橋」の形式については5節で分析する。小川・浅井（1935: 109）によると、サイシャット語には音素 *ɹ* があるが、失われることもあることが述べられている²⁶。サイシャット語の「虹」はアタヤル語の表現と類似しており、名詞句内の語順は「橋—連結辞—神霊」となっている。

4. アタヤル語群の「橋・梯子」とサイシャット語の「梯子」

本節ではアタヤル語において「橋・梯子」を意味する形式 *hawju* と、セデック語において同様の意味を持つ形式 *hakaw* について、これらが同源関係にあるかどうかを探る。二つは形式的に類似性があるように感じられる。

表6 アタヤル語群の「橋・梯子」とサイシャット語の「梯子」

アタヤル語	h	aw	ŋ	u
セデック語	h	a	k	aw
サイシャット語	h	a	ŋ	aw

しかし、表6の上の二列に示したように、分節音が一致するのは語頭子音の *h* のみである。その次に来る母音はア

タヤル語が二重母音 *aw* であるのに対し、セデック語は単母音の *a* である。語中子音はアタヤル語が *ŋ* であるのに対し、セデック語は *k* である。語末母音はアタヤル語が *u* であるのに対し、セデック語は *aw* である。このように分節音の一致性が低いために、これらが同源語であるとは見なしにくい。

この「橋」に関して、Li（1981: 279）は、アタヤル語群祖語に **hakaw* と再建しているのであるが、この再建の根拠となるデータはセデック語の *hakaw* と、アタヤル語ではツオレ方言のマリナハ集落にだけ見られる *hakaw* という、セデック語と同一の形式である²⁷。Li（1981）のこの再建形において、アタヤル語集落全域で見られる *hawju* という形式は考慮されていない。つまり同源語と見なされていない。しかし、筆者はこのアタヤル語の *hawju* が、セデック語の *hakaw* の同源語である可能性が高いと考える。その根拠がサイシャット語に得られた同源語である。しかも、アタヤル語において、マリナハ集落にしか見られない *hakaw* の形式は、この集落だけ局所的に祖形を保存している可能性よりも、セデック語から再導入された形式である可能性の方が高いのではないかと考える。マリナハ集落は後龍溪沿岸に位置するが、移川他（1935: 61-64）は、この後龍溪の沿岸に点在するアタヤル系の氏族の名称を挙げている。その中にマカタシエク氏族（*Makatashek, Makataseq, Makatase?*）という氏族があり、「マカタシエクはアタヤルとは異なる」や「*Katashek* は霧社を云ふ場合があると云ふ」と述べている（移川 1935: 62-63）。もし、*Katashek* (*Makatashek* の語頭の *ma* は接頭辞だろう) が、霧社を指すなら、霧社はセデック族パラ集落のこと

であるから、後龍溪沿岸にセデック族が進出し、アタヤル族と接触していたことになる。だとするとセデック語の *hakaw* がこの地域のアタヤル語に取り入れられたのも考えられないことではないだろう。

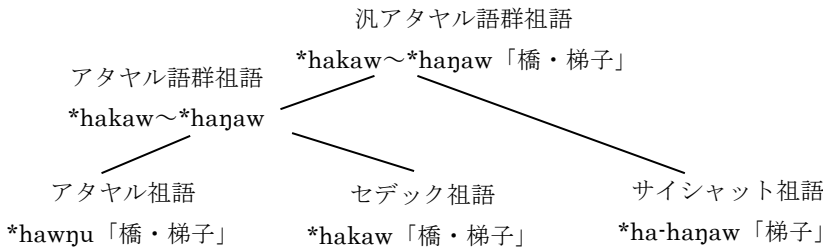


図2 汎アタヤル語群祖語の「橋・梯子」

サイシャット語の「梯子」は *hahajaŋaw* (原住民族委員会 2013) である。この形式において、第一音節の *ha* は、第二音節を重複したものと見なせる (*ha-hajaŋaw* と分節される)。つまり、語根は *hajaŋaw* であると予想される。この語根 *hajaŋaw* は、セデック語の形式 *hakaw* と比べると、語中子音が *ŋ* か *k* だけの違いで、残りは一致している。そのため同源語と見なせる²⁸。祖形において語中子音がどちらか判断できないので、どちらも再建するなら **hakaw* と **hajaŋaw* が汎アタヤル語群祖語の形式である。サイシャット語は後者の形式を持つに至っている (ただし、第一音節の重複を起こした)。

そして、図2に示したようにアタヤル語群祖語の段階でも **hakaw* と **hajaŋaw* の両方を保持していたと考えた。セデック語は *hakaw* を持つに至ったが、アタヤル語では *hajaŋaw* を有するようになった。しかし、*hajaŋaw* は、なぜかはわからないが突発的に母音に変化を生じさせた。第一音節の *a* が *aw* になり、第二音節の *aw* は *u* になり、最終的に *hawju* になったと考えられる。

5. サイシャット語の「橋」とセデック語の「繋ぐ」

表2の3行目にあるようにサイシャット語の「橋」と「梯子」は別々の形式である。サイシャット語の「梯子」である *hahajaŋaw* については4節で、アタヤル語群の「橋・梯子」と同源関係にあることを述べた。本節では、サイシャット語の「橋」を分析する。ここまでに挙げられた「橋」の形式を表7にまとめた。

表7 サイシャット語の「橋」に関する形式のまとめ

<i>.inalob</i>	<i>alob</i> ~ <i>.alob</i>	
「虹」(神霊の橋)	「橋」として一般的に用いられる	単なる「橋」の意味で用いられるのは <i>alob</i> または <i>.alob</i> である。これは本来 <i>.alob</i> だったものが、前者では語頭子音が脱落したものと考えられる。この <i>alob</i> のほうは、「神霊の橋」の表現の中の「橋」としても用いられていた。もうひとつ、 <i>.inalob</i> という形式が得られたが、これは「神霊の橋」の中の「橋」として用いられるが、単なる「橋」との意味としては用いられていないようである。
にのみ見られる	「虹」(神霊の橋)にも見られる	

単なる「橋」の意味で用いられるのは *alob* または *.alob* である。これは本来 *.alob* だったものが、前者では語頭子音が脱落したものと考えられる。この *alob* のほうは、「神霊の橋」の表現の中の「橋」としても用いられていた。もうひとつ、*.inalob* という形式が得られたが、これは「神霊の橋」の中の「橋」として用いられるが、単なる「橋」との意味としては用いられていないようである。

形式上、*inalob*「橋」と *alob*（語頭子音を保存している形式の方を代表として用いる）との違いは、前者の語頭子音 *ɿ* の後に、*in* という要素が割り込んでいることである。サイシャット語には、動詞に付加され、一種の受動態であるところの対象態並びにその過去時制を表す形態として、*<in>* という接中辞がある（小川・浅井 1935: 110）。これは「～された（もの）」の意味を表すが、*ɿ<in>alob* に割り込んでいる要素の *<in>* はこの接中辞だと考えられる。だとすれば語根は *alob* であり、これは動詞ということになる。この形式の動詞としての意味は何か、そしてそれがどのように「橋」の意味を派生したか探してみたが、先行研究に見つけられなかった。

表 8 オーストロネシア祖語 *RaLub 「繋ぐ」の再建²⁹

サイシャット語	<i>alob</i> 「繋ぐ、橋」
セデック祖語	*galub 「繋ぐ」
アミ語	<i>ladof</i> 「連合（する）」
オーストロネシア祖語	*RaLub 「繋ぐ」

ところが、セデック語に同源語がある。セデック語に *galuk* という動詞があり、意味は「繋ぐ」である（Rakaw 他 2006: 243）。語末子音はサイシャット語で *b*、セデック語で *k* になっている

が、セデック語は語末子音の歴史的変化が大きいためである。セデック語の歴史的語末子音は、接尾辞を付けると復活する。セデック族に *gulub-an* という集落がある³⁰。本来の意味は同盟であったと推察される。この集落名は語根に場所を表す接尾辞 *-an* が付加されたものであり、語根末は歴史的音素の *b* で現れる。第一音節の母音が本来の *a* から *u* に変わっているのは母音弱化によるものである³¹。このことからセデック祖語は *galub と再建される。これとサイシャット語の *alob* は同源語として、分節音が完全な音対応を示す。これらから再建される汎アタヤル系祖語は *Ralub となる。さらに、アミ語にも同源語を見つけたことができた。アミ語に *ladof* という形式があり、意味は「連合（する）」である（呉 2013: 295）。表 8 に示したように、これら同源語から再建されるオーストロネシア祖語の形式は *RaLub となる。

表 9 サイシャット祖語の「橋・梯子」の歴史的変化

	橋	梯子
I	*ha-haŋaw	*ha-haŋaw
II	*ialob	*ha-haŋaw

サイシャット語の *alob* の場合、本来「繋ぐ」という動詞であったがその用法は現在では、「神霊の橋」の中の「橋」を表す語、*ɿ<in>alob* に

しか見られない。これは本来「繋がれたもの」を意味していたのだろう。本来動詞であった *alob* だが、次第に「橋」を意味する名詞に転用されるようになったのではないか。これに関し、4 節で汎アタヤル語群祖語に *hakaw ~ *haŋaw を「橋・梯子」として再建したが、サイシャット祖語の反映形 *ha-haŋaw は「橋」の意味を失い「梯子」の意味だけになっている。これは *alob* が「橋」を意味するようになったことと無関係ではないだろう。表 9 に推察される歴史的変化を示した。第 I 段階において本来同一の語で表された「橋・梯子」がその後、第 II 段階になると「橋」と「梯子」に分れた。「橋」は「繋ぐ」という動詞から改新された形式、「梯子」は祖形を保存した形式を用いるようになったのではないか。

6. おわりに

アタヤル語、セデック語、サイシャット語は「虹」を「神霊の橋」という名詞句で表現する。本稿はこれら三つの言語の「神霊の橋」の表現中に見られる「橋」を分析することを通して、汎アタヤル語群祖語における「橋・梯子」の形式を再建した。図2と表9をひとつにまとめたのが表10である。

表10 汎アタヤル語群祖語の「橋・梯子」

汎アタヤル語群祖語	*hakaw~*hajaw 「橋・梯子」	汎アタヤル語群祖語には語中子音の異なる二つの形式*hakaw と*hajaw が再建された。セデック祖語は前者を保存している。アタヤル祖語は語中に <i>ɣ</i> を有するため後者に由来すると考えられるが、二音節語から成る祖形の母音を、どちらの音節においても突発的に変化させた。サイシャット祖語も語中に <i>ɣ</i> を有するため後者に由来すると考えられる。語頭の音節を重複した形式が用いられる。これらも古くは「橋・梯子」を隔てなく表したと考えられるが、現在では「梯子」のみを表す語であるから、「橋・梯子」から「梯子」への意味的な狭まりが起きた。失われた「橋」の意味は、*ɾalob という本来は「繋ぐ」を意味する動詞からゼロ派生された形式によって補われるようになった。本稿では、サイシャット語の改新された「橋」である*ɾalob とこの同源語を台湾オーストロネシア諸語に探り、この語が*Ralub 「繋ぐ」という形式・意味でオーストロネシア祖語にまで遡る可能性も示唆した。
アタヤル祖語	*hawju 「橋・梯子」	
セデック祖語	*hakaw 「橋・梯子」	
サイシャット祖語	I. *ha-hajaw 「橋・梯子」 II. *ɾalob 「橋」、*ha-hajaw 「梯子」	

汎アタヤル語群祖語には語中子音の異なる二つの形式*hakaw と*hajaw が再建された。セデック祖語は前者を保存している。アタヤル祖語は語中に *ɣ* を有するため後者に由来すると考えられるが、二音節語から成る祖形の母音を、どちらの音節においても突発的に変化させた。サイシャット祖語も語中に *ɣ* を有するため後者に由来すると考えられる。語頭の音節を重複した形式が用いられる。これらも古くは「橋・梯子」を隔てなく表したと考えられるが、現在では「梯子」のみを表す語であるから、「橋・梯子」から「梯子」への意味的な狭まりが起きた。失われた「橋」の意味は、*ɾalob という本来は「繋ぐ」を意味する動詞からゼロ派生された形式によって補われるようになった。本稿では、サイシャット語の改新された「橋」である*ɾalob とこの同源語を台湾オーストロネシア諸語に探り、この語が*Ralub 「繋ぐ」という形式・意味でオーストロネシア祖語にまで遡る可能性も示唆した。

* 本稿の議論の一部は、2020年11月25日に北海道大学アイヌ・先住民研究センターにて行ったオンライン公開講座「アタヤル語とセデック語の『神霊の橋』—『虹』にまつわる言葉のはなし—」で紹介した。コメントをいただいた皆様に感謝申し上げます。匿名査読者のお二人からいただいた助言にも感謝申し上げます。しかしながら本稿の不備は筆者のみに責任がある。

注

- ここ数年、台湾においてアタヤル語群とサイシャット語をまとめて「汎泰雅」（汎アタヤル）という呼び方をするようになった。これは系統的に立証された分類というより、地域のおよび文化的共通性を根拠に便宜的に付けられた呼び名のようなものであるが、筆者は系統的にアタヤル語群とサイシャット語をまとめるにあたって、この「汎」の字を採用し、「汎アタヤル語群」とした。ちなみに筆者はアタヤル語群・サイシャット語の他にも、汎アタヤル語群に含まれる台湾オーストロネシア諸語があると考えているが、本稿ではそこまで踏み込まない。
- アタヤル語「虹」（小川・浅井 1935: 付録 13）；「橋」（小川 1931: 297）；「梯子」（小川 1931: 298）、セデック語「虹」（小川・浅井 1935: 付録 13）；「橋」（Rakaw 他 2006: 275）；「梯子」（安倍 1930: 423）、サイシャット語「虹」（小川・浅井 1935: 付録 13）；「橋」（Ferrell 1969: 249）；「梯子」（安倍 1930: 422）、ツォウ語「虹」（小川・浅井 1935: 付録 13）；「橋」（Ferrell 1969: 249）；「梯子」（安倍 1930: 422）、アミ語「虹」（小川・浅井 1935: 付録 13）；「橋」（Ferrell 1969: 249）；「梯子」（安倍 1930: 422）、

バサイ語「虹」(Tsuchida 他 1991: 248)；「橋」(Tsuchida 他 1991: 234)、ブヌン語「虹」(小川・浅井 1935: 付録 13)；「橋」「梯子」(原住民族委員会 2013)、カナカナブ語「虹」「橋」「梯子」(原住民族委員会 2013)、サアロア語「虹」(小川・浅井 1935: 付録 13)；「橋」「梯子」(原住民族委員会 2013)、ルカイ語「虹」(小川・浅井 1935: 付録 13)；「橋」「梯子」(原住民族委員会 2013)、カバラン語「虹」「橋」「梯子」(Li and Tsuchida 2006: 295; 387; 518)、パゼッヘ語「虹」「橋」「梯子」(Li and Tsuchida 2001: 190; 283; 243)、サオ語「虹」「橋」「梯子」(安部他 2008: 219; 201; 212)、パイワン語「虹」(小川・浅井 1935: 付録 13)；「橋」「梯子」(小川 1930: 277)、プユマ語「虹」(小川・浅井 1935: 付録 13)；「橋」「梯子」(Cauquelin 2015: 56; 183; 371)、バブザ語「虹」「橋」「梯子」(小川 2003: 38; 112; 154)、パポラ語「虹」(Tsuchida 1982: 93)、ホアニャ語「虹」「橋」(Tsuchida 1982: 93; 89)、シラヤ語「虹」「橋」「梯子」(Van der Vlis 1842: 454; 456)、ヤミ語「虹」(原住民族委員会 2013)；「橋」(Ferrell 1969: 249)。ヤミ語の「梯子」について安倍 (1930: 423) に「ララク ラガン」とあるが、これをローマ字に転記するのが困難であったため表には入れなかった。

3 Ogawa (2003: 154) には類似の形式 *tarrabeoan* と *tarraboan* も見られる。

4 この形式において *t* が重複しているのは、その直前の母音が音声的に長いものではないことを示すというオランダ式の表記法に基づくものである。Ogawa (2003) は 17 世紀においてオランダ人が記録したバブザ語の資料を基に、バブザ語の語彙を編纂したものである。

5 ホアニャ語の形式は『諸羅縣志』(周 1717) による。ホアニャ語は早くに消滅した言語であるため、この他に資料がほとんどない。『諸羅縣志』では漢字によってホアニャ語の形式が表記されている。その漢字を Tsuchida (1982) は閩南語の発音に従って転写しているとみえる。それぞれの漢字に対するローマ字転写の間にはハイフンが挿入されている (ローマ字転写の後ろに本来の漢字表記が記されているが、本稿でも括弧内に漢字表記を示した)。Tsuchida (1982: 93) は「打」を *ta* と転写しているが、本稿では *pa* に糺した。

6 「虹」を「帯」と関連付ける伝承はアイヌ民族にも見られる。松名 (2007: 87) に、天に投げられた七色の帯が虹であるという言い伝えが載せられている。日本語における虹の別称としての「をふさ」も同様で、荻野 (1999a: 68) はこの語源を「緒房 (佩物の下に垂れる飾紐)」と解釈している。

7 荻野 (1999a: 67) にはサンスクリット語で「虹」を「インドラ神 (帝釈天) の弓」と表現するとある。アミ語の「虹」はこれに類した表現といえる。さらに荻野 (1999b: 127) には、通言語的な「虹」の表現の類型のひとつとして「弓・弧」系 (天弓・雨弓・神弓型) が挙げられている。アミ族のイドクが神話上の人物であるため、アミ語の「イドクの罫」は神弓型に含まれるだろう。また、Leach (1950: 922) には、イランのイスラム教徒の間で「虹」を「ラストム (ペルシャの伝説上の英雄) の弓矢」と呼ぶと述べられているがこれも類例だろう。

8 オーストロネシア祖語 **daqaNi* 「日、日中」(Blust and Trussel 2010) に遡ると考えられる。最終音節の **Ni* だけが残り、それより前の音節は消失している。これに対し、時・空間を表す接尾辞の *-an* が後続したと思われる。それぞれの「天」の形式において **N* はバサイ方言で *ʃ* に、トロビアワン方言で *ɬ* になっている (Tsuchida 他 (1991) において *z* と表記するが恐らく *d* が、母音 *i* の前で口蓋化したものだろう) が、これは規則的な音対応ではない。バサイ語で **N* は *n* になるはずである (Ross 2015: 32)。だとすると、バサイ語は「天」の形式を、*ʃi-an* (これがさらにバサイ語バサイ方言で母音連続 *ia* の *e* への変化により *ʃen* になったのだろう) や *ɬi-an* と表現する近隣の言語から借用したのではないか。筆者の調べた限りでは、アタヤル語 *qali-yan* 「日中」(小川 1931: 320) や

- セデック語トゥルク方言では *di-an* 「日中」(Rakaw 他 2006: 340) が形式的に近いと考えられる。因みにセデック語パラン方言では *di-an* であるため、トゥルク方言では語頭子音の *d* が口蓋化している。しかし、過去においてバサイ語がアタヤル語群の語彙を取り入れるほど、二者間の接触が濃密であったかはわからない。
- 9 カナカナブ語の「虹」の形式に接中辞<*ar*>が含まれることを特定したのは Nihira (1988: 302) である。同種の接中辞はサアロア語の「虹」の形式にも見られる。
- 10 Nihira (1988: 302) もルカイ語やカナカナブ語の「虹」の形式から **baRbaR* を再建しており、このほか同源語としてマオリ語 *aniwaniwa*、ラパヌイ語 *hanuanua*、タヒチ語 *anuanua*、サモア語 *nuanua* 等を挙げている。筆者もこれらがブヌン語 *qani-valval* 系列の同源語である可能性があると考えられるが、重複形は **waLwaL* の可能性が高いだろう。これら形式には Blust (2001) の言う **qali*-系の接頭辞が付いていると考えられる。順に分節した形式は(重複部は太字) *ani-wan-i-wa*、*han-uan-ua*、*an-uan-ua*、*n-uan-ua* となるだろう。これら形式には語末子音の欠落が見られる。マオリ語の形式が同源語と見なせる形式をよく保存する。他の形式では *w* が *u* に変わっていると考えられる。
- 11 古野・馬淵 (1938: 77) によると、ブヌン族において虹は首を斬られた者の亡霊の化身と見なされるそうである。
- 12 Blust (2001: 38) において、台湾オーストロネシア諸語の「虹」に接頭辞が付いているとして挙げられた言語は、ルカイ語、サオ語、カバラン語、プユマ語、ブヌン語である。
- 13 この接頭辞 **qali*-は、アタヤル語群祖語の「神霊」 **ʔaliutux* (Li 1981: 284) にも付加されているのではないかと思えてくる。この語は、アタヤル語群における語の典型的音節数である二音節を逸脱し、四音節もある点が奇妙でならない。そのため **ʔali-utux* と分節するののひとつの可能性だろう。接頭辞が **ʔali* であり **qali* ではないのが難点ではある。しかし、**ʔali* の要素が現代において残っているのはアタヤル語ツオレ方言のみであり、ツオレ方言では **q* が **ʔ* に変わっている。ツオレ方言のみを手掛かりに **ʔali* の部分は再建されている。そのため、語頭子音の **ʔ* はさらに **q* に遡り、アタヤル語群祖語は **qali-utux* と再建される可能性がある。
- 14 古野・馬淵 (1938: 77) では、パイワン族とルカイ族も「虹」を「神霊の橋」となすという(が、パイワン語とルカイ語の「虹」の形式の語義は明らかでないともいう)。しかし、表 2 にあるようにパイワン語とルカイ語の「虹」に「橋」は含まれない。
- 15 アタヤル語はスコレック方言とツオレ方言に大別される(小川・浅井 1935)。筆者のフィールド調査(2018年から2019年にかけて)によると、アタヤル語スコレック方言の音素は母音 /*a e i o u ə*/、二重母音 /*aw ay uy*/、子音 /*p β t k ɣ q ʔ s x h z r l m n ŋ y w*/ であった。母音 *o* と *e* はそれぞれ二重母音 *aw* と *ay* に遡ることがこれまでの調査において観察できた。また、語の音節数は典型的には二音節で、CV.CVC という音節構造の型を持つ。音節末子音が現れるのは、基本的に語末音節に限られ、次末より前には現れない。Huang (1995: 16-17) におけるアタヤル語ツオレ方言の音素目録によると、ツオレ方言では /*s*/ を持ち、/*ʔ*/ を持たない。表 1 に挙げた集落で「神霊」の形式が *utux* であるのがスコレック系、それ以外がツオレ系と考えられる。
- 16 クレサン集落(コーゴツ小集落)における「虹」形式も「ハカオオットフ」と載っているが、表には含めなかった。この小集落はセデック族がアタヤル集落に入り込んだものであり(移川他 1935: 31)、「虹」の形式はセデック語に一致する。
- 17 サイシャット語の「虹」の形式中に見られる連結辞は *noka* である。小川・浅井 (1935: 112) には、サイシャット語に *no* という形式が *no-ka* とともに属格として挙げられており、*ka* は主格とし

- て挙げられている。そのため *no-ka* は属格標識 *no* と主格標識 *ka* が合成されたものである。サイシャット語本来の属格標識である *no* (本稿に見られる複合語中では連結辞として働いている) が、これらのアタヤル語変種に影響し、アタヤル語本来の *na* を *no* に取り換えたのかもしれない。確かに、カラパイ集落とガオガン集落はサイシャット族と地理的に隣接する地域のアタヤル族である。
- 18 なぜかサラマオ集落だけは、*utux hoju* (神霊一橋) であり、典型的な語順の逆になって現れている。
- 19 Li (1981: 284) における注釈は ‘ghost’ (幽霊) となっている。
- 20 これはシャカロー集落とカラパイ集落に、スコレック方言とツオレ方言の二つのアタヤル語方言が混在することを示唆している。
- 21 Li (1981) が挙げた形式 *hakri?* には語末に声門閉鎖音が現れているが、本稿ではそれを音声的な現れと見なし省いている。
- 22 落合 (2020) では化石接尾辞と呼んでいる。
- 23 セデック語はパラソ方言とトゥルク方言に大別される (小川・浅井 1935)。筆者のフィールド調査 (2011 年から 2020 年にかけて) によると、セデック語パラソ方言の音素は母音/a e i o u/, 二重母音/uy/, 子音/p b t d t s k g q s x h m n ŋ l r w y/ である。母音 *o* と *e* はそれぞれ二重母音 *aw* と *ay* に遡る。落合 (2015) によると、この変化はパラソ集落において 1920 年代から 1970 年代に起こったとされる。「橋」は現代セデック語パラソ方言では *hako* であるが、変化前の時代に記録した佐山 (1917) では *hakaw* である。月田 (2009: 56-62) によると、セデック語トゥルク方言は母音/a i u ə/, 二重母音/aw ay uy/ を持ち、子音ではパラソ方言と同じだが/tʰ/がない。
- 24 ちなみに、佐山 (1920) にもサイシャット語二つの方言、大隘方言と東河方言の「虹」の形式が挙げられている。大隘方言では「リナロム」(「ロ」の上には符号が付いている)、東河方言では「アロブ」とある。これはそれぞれ、*inalob* と *alob* に相当すると考えられる。先行研究の表記では、*u* と *o* とで揺れる場合があるが Li (1978: 138) において、音素として *o* が存在するが *u* は存在しないことに照らし合わせ、先行研究の表記で *u* とされる分節音は *o* に改めている。Li (1978: 140) によると、サイシャット語の母音 *o* は、特殊な条件の場合を除きオーストロネシア祖語の **u* に遡る。
- 25 語頭に *ɹ* の付いた形式が、サイシャット語大隘方言、付いていない形式が東河方言として挙げられている。ちなみに Li (1978) は *ɹ* を *L* と表記している。
- 26 この音素記号は歯茎付近の接近音を表す。
- 27 3-1 節でも述べたが、Li (1981) はマリナハ集落にもうひとつの *hakri* という形式 (表 4 に見られる形式) もあると述べる。
- 28 ただし *k* と *ŋ* が揺れるような語は頻繁には見られないため、歴史的にはどちらか一方が突破的にもう一方に変化したと考えられるのだが、本稿では今のところ *k* と *ŋ* を持つ「橋」の両方の形式を汎アタヤル語群祖語に再建している。今後、他の言語で同源語が発見されるのを俟ちたい。アタヤル語群において一例だけ *k* から *ŋ* への突発的な変化が見られる語がある。それはセデック語パラソ方言の存在否定辞 *uka* 「無い」とそのトゥルク方言における同源語 *uŋat* である (形式は Rakaw 他 (2006: 907) から引用)。Ochiai (2020) によると、他のオーストロネシア諸語の比較から、アタヤル語群祖語は **uka* と再建されうる。セデック語トゥルク方言では **k* が *ŋ* に変わり、さらに語末に *t* を付けた (ちなみにトゥルク方言の形式はアタヤル語スコレック方言と同一であるため、ス

- コレック方言からの借用が疑われる)。
- 29 オーストロネシア祖語の音素*LはRoss (2015)の表記法に基づく。
- 30 中国語の集落名は清流と言う。
- 31 この集落はパラシ族の集落である。次末音節より前の音節が母音弱化するのはセデック語パラシ方言とトゥルク方言とにも見られるが、弱化母音が *u* になるのはパラシ方言の方であり、トゥルク方言では月田 (2009) に述べられるように *a* になる。

引用文献

安倍明義

1930 『蕃語研究』 蕃語研究会、台北。

安部清哉・長嶋善郎・新居田純野 (編)

2008 『サオ語 (台湾・邵語) 語彙 (英語・日本語索引付) —サオ語研究資料 II—』 学習院大学東洋文化研究所、東京。

Blust, Robert

1999 Subgrouping, Circularity and Extinction: Some Issues in Austronesian Comparative Linguistics. In *Selected Papers from the Eighth International Conference on Austronesian Linguistics*, Elizabeth Zeitoun and Paul Jen-kuei Li (eds.), Taipei: Institute of Linguistics (Preparatory Office), Academia Sinica, pp.31-94.

2001 Historical morphology and the spirit world: the *qali/kali- prefixes in Austronesian languages. In Joel Bradshaw and Kenneth L. Rehg. (eds.) *Issues in Austronesian morphology: a focusschrift for Byron W. Bender*, Pacific Linguistics, Canberra, pp.15-73.

Blust, Robert and Stephen Trussel

2010 *Austronesian Comparative Dictionary, Web Edition*. <http://www.trussel2.com/ACD/>.

Cauquelin, Josiane

2015 *Nanwang Puyuma-English dictionray*. Institute of Linguistics, Academia Sinica, Taipei.

Ferrell, Raleigh

1969 *Taiwan aboriginal groups: problems in cultural and linguistic classification*. Institute of Ethnology, Academia Sinica, Taipei.

古野清人・馬淵東一

1938 「虹をめぐる高砂族の口碑と習俗」『旅と伝説』7: 75-79.

Huang, Lillian M.

1995 *A Study of Mayrinax Syntax*. Crane, Taipei.

黄美金

2000 『泰雅語参考語法』遠流、台北。

小泉鐵

1932 『蕃郷風物記』建設社、東京。

Leach, Maria (eds.)

1950 *Standard Dictionary of folklore, mythology and legend*, Volume 2. Funk and Wagnalls, New York.

Li, Paul Jen-kuei

1978 A comparative vocabulary of Saisiyat dialects. *Bulletin of the Institute of History and Philology*,

Academia Sinica 49: 133-199.

1981 Reconstruction of Proto-Atayalic phonology. *Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica* 52(2): 235-301.

Li, Paul Jen-kuei and Shigeru Tsuchida

2001. *Pazih dictionary*. Institute of Linguistics, Academia Sinica, Taipei.

Li, Ren-kuei, and Shigeru Tsuchida.

2006. *Kavalan dictionary*. Institute of Linguistics, Academia Sinica, Taipei.

松名隆

2007 「アイヌ語の気象語彙とアイヌの基層文化—萱野茂氏からの聞き書きを交えて—」『地域環境に関する歴史的・文化的・社会的研究』79-92.

Nihira, Yoshiro

1988 *A Bunun vocabulary: A language of Formosa*. Ado-in Kabushiki Kaisha, Tokyo.

Nevsky, Nikolai A.

1993[原書 1933] 『台湾鄒語語典』臺原、台北.

落合いずみ

2015 「セデック語パラン方言の二重母音について」『日本言語学会第 150 回大会予稿集』日本言語学会、京都、392 -397 頁.

2020 「アタヤル語群における『肩』の再建」『アジア・アフリカ言語文化研究』100: 141-153.

Ochiai, Izumi

2020 Negators in Atayalic languages from a comparative viewpoint, presented at 'Workshop on Negation and Sino-Tibetan Language 2,' on Jan. 12, 2020.

小川尚義

1930 『パイワン語集』台湾総督府、台北.

1931 『アタヤル語集』台湾総督府、台北.

Ogawa, Naoyoshi

2003 *English-Favorlang vocabulary*. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo.

小川尚義・浅井恵倫

1935 『原語による台湾高砂族伝説集』台北帝国大学言語学研究室、台北.

荻野恭茂

1999a 「世界の<ニジ>語と日本語」『椴山国文学』23: 61-69.

1999b 「虹と日本文藝—比較研究資料・通考—」『椴山女学園大学研究論集(人文科学篇)』30: 127-138.

Rakaw, Lowsi, Jiru Haruq, Yudaw Dangaw, Yuki Lowsing, Tudaw Pisaw, and Iyuq Ciyang 編

2006 『太魯閣族語簡易字典』秀林郷公所、秀林郷.

Ross, Malcolm

2015 Some Proto Austronesian coronals reexamined. In Zeitoun, Elizabeth, Stacy Fang-Ching Teng, and Joy J. Wu (eds.) *New advances in Formosan linguistics*, pp.1-38.

佐山融吉

1917 [復刻 1983] 『蕃族調査報告書：紗績族調査報告書前篇・後篇』南天書局、台北.

1918 [復刻 1983] 『蕃族調査報告書：大么族前編』南天書局、台北.

1920[復刻 1983]『蕃族調査報告書：大々族後編』南天書局、台北。

Tsuchida, Shigeru

1982 A comparative vocabulary of Austronesian languages of sinicized ethnic groups in Taiwan, part I. West Taiwan. *Memoirs of the Faculty of Letters, University of Tokyo* 7: 1-166.

Tsuchida, Shigeru, Yukihiro Yamada, and Tsunekazu Moriguchi

1991 *Linguistic materials of the Formosan sinicized polulations I: Siraya and Basai*. The University of Tokyo, Linguistics Department, Tokyo.

月田尚美

2009「セデック語（台湾）の文法」東京大学博士論文。

移川子之藏・宮本延人・馬淵東一

1935『台湾高砂族系統所属の研究』台北帝国大学土俗人種学教室、台北。

Van der Vlis, Christianus Jacobus

1842 *Formosaansche woorden-lijst, volgens een Utrechts Handschrift*. [Word list of Formosan according to a manuscript from the archives of Utrecht]. In *Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap*, 18:437-488.

吳明義

2013『阿美族語辭典』南天書局、台北。

原住民族委員会

2013『原住民族語 E 樂園』<http://web.klokah.tw>

周鐘瑄

1717『諸羅縣志』

(おちあい・いずみ／北海道大学アイヌ・先住民研究センター)